



Title	懐徳堂の追想
Author(s)	岡野, 廉平
Citation	懐徳. 1966, 37, p. 115-117
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/90434">https://hdl.handle.net/11094/90434</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

りの講義を聞くのである。白髪や禿頭の老人に交って袴をつけた子供の私が聞いてゐるのである。

聽講料を拂った記憶はない。テキストの印刷費として三十錢位を拂ったと思ふ。

半分は居眠り乍ら、理解出来ないこともあったが、とにかく勉強したい一心であつたのであらう。第三高等學校、東京帝國大學と進學をして、さて縁あつて住友に入社すると、小倉正恒さんが特に懷德堂に興味を持つておられると聞いて特別の感慨を催した。小倉さんの在世中にこんな思出話をする機會を失したのは残念であつた。

當時の講師先生は勿論一緒に講義を聞いた人々は殆んどこの世を去られたであらう。私の誘つた同年輩の友人も既に世を去つた。

心學と共に大阪町人の心の糧として育つた。今の言葉で云へば産學協同のはしりでもあらうか。前垂がけで店

## 懷德堂の追想

が仕舞つてからでも誰でも聞きに来て宜しいと云つて来た懷德堂である。

終戦前後の混亂した時代には、懷德堂のごとき維持は大變であつたと思ふ。しかも講堂は戦災にかかつて跡かたもなくなつた。小倉さんは南京に抑留されて、やがて無事歸國されたが追放の身の何ともならない。しかもこの懷德堂を何とか維持させたいとの御熱意からであつたであらう。昭和二十三年頃かと思ふ。住友電氣工業株式會社常務であつた私を呼ばれて、住友電工、住友金屬工業、日本板硝子、住友銀行外一ヶ所失念、年一萬圓宛六萬圓の出資を要望された、お誘ひを受けた各社は舉つてこの御要望にこたえたが、そのうちに大阪大學に引つがれて、今日に至つた。その一時期の一挿話をおぼろげな記憶を辿り乍ら記して見ました。

## 岡野廉平

新懷德堂の重建開講五十周年を迎えるに當つて、多年經營發展に盡力された各位の功績を思うこと切なるもの

がある。私は大正十一年、永田理事長、小倉理事(會計擔當)時代、はからずも幹事を拜命し、若年の自分が果して勤

まるだるうかとの不安に驅られたものであるが、又一面住友家の事業をばくくみ育て、且私自身第二の故郷とも思つてゐる大阪の學問文教に關する事柄なので、興味も湧き芳々勉強もしたいなど思つたことであつた。事務は會計に關することが多かつたが、自念經營面にもタッチせざるを得なかつた譯である。

今この四十餘年を回顧して、理事長はさて置き、今は故人となられた常務理事今井貫一、木間瀨策三御兩所の懷徳堂に對する熱意と、その態度とに思い及ぶ時、眞に頭の下るを禁じ得ないのである。

今井さんは四國徳島の人、東大文學部を出られて、岡山縣高梁中學校長の時聘せられて府立大阪圖書館長となり、晩年には市立天王寺美術館開設と同時に初代館長となられたことは、普く人の知るところである。また前記中之島圖書館と住友家との關係からか、住友家史編纂のことをも委囑され、毎週日を決めて住友本社の一室に見えてゐた。そして懷徳堂のことについては巨細小倉理事（後の理事長）と相談してゐられたようであつた。事實當時は、講座の擴充、教授講師の異動、幾多の記念出版、書庫研究室の新築、碩園文庫の受入、侍從御差遣、宮様方及び内外賓客の來堂、孔子祭其他の行事等數え上げれば限りがないほど多かつたやうに思ふ。また同氏

は文章殊に挨拶文に堪能であられたので、懷徳堂關係のものは勿論のこと、其他のものも草案の起草添則を爲さることはしばしばであつた。私も小倉住友總理事から私的な挨拶文の起稿をよく命ぜられたが、自分に自信が持てぬままに今井さんに閱覽を請うたものである。その間いろいろ御教示に預つた譯であるが、今に志じ難いことは、文範として新村出博士の著書を、「文法に適つた名文」と推賞されたことである。當時同博士の新著「南蠻更紗」等は味讀したし、後に刊行された「辭苑」は住友本社秘書室の机上に常備したことも懐しい想出である。

木間瀨さんは、懷徳堂重建のことが決まり、東區豊後町（舊府立博物場の北角）の府有地三六一坪の無償貸與を決定された大久保利武知事の下に内務部長であつたといふ因縁があり、夙に漢詩文に興味を持たれた方のように聞いてゐるが、今井常務理事の歿後、理事から其後を襲はれたのである。時恰も第二次世界大戰が初まり、不自由不如意の時であつたが、懷徳堂友會の育成補助には特に深い關心を示されたのであつた。後年大阪に「なにわ賞」が制定せらるるや、懷徳堂は團體第一號として受賞のこととなり、同氏は大手前會館に於ける授賞式に出席中俄かに倒れられ、一度は回復せられたのであるが、遂に昭和三十一年十二月遠逝されたのであつた。爾來常

務理事は空席の儘今日に至ってゐる。

なお、本年六月、惜しくも逝去された武内顧問について追憶を書き添えたい。

武内義雄博士は北野中學、三高より京大文學部に學ばれた篤學の漢學者であるが、懷德堂再建の際には府立大坂圖書館に在って盡力して下され、開講後は永年専任講師として聽講生の指導啓發に當られ、懷德堂から中國に留學されたのであった（この中國留學は堂の講師吉田鏡雄氏が中國へ研究に出られた際文部省在外研究員となつてゐることに關連する）。かくて大正十二年三月東北帝大教授に任ぜられたのであるが、その時私が小倉、今井御兩所のお話を拜聽して印象が深かったのは、舊懷德堂の五井蘭洲先生が仙臺伊達侯に招聘せられ、大阪より赴任せられた故事に擬えて語つてゐられたことである。武

## 堂友の斷想雜錄

### 西村天囚先生書「忠僕茶屋」舟板の額

藤 塚 誠 二

この西村天囚先生（懷德堂記念會創立者）書、舟板の

内先生は東北帝大に在任中學位を授與され、後には法文學部長になられ名聲一世に高かつた譯であるが、終戦後は宮中にも出仕、皇太子殿下の讀書、書道の指導役になられたことは記憶に新たなところである。また内藤・狩野兩顧問の歿后懷德堂顧問に就任せられた。私は古く大正の頃小倉さんの命を受け、文章の添削を請うべく東吹田の御宅迄伺つたことがあり、多年懷德堂を通じ警咳に接すること屢々であったが、近年には公刊された決定版「論語」を受贈、また立派な双幅の墨迹をも拜戴するなど、年來の御高誼御示教には感銘に堪えないものがあり、光榮至極に存じてゐる。茲に先生が一生を通じ懷德堂に對し、親愛の情を以て見守つて下さつた御盛意に、深厚なる敬意を表して筆を擱く次第である。

額の「忠僕茶屋」というのは大槻重助という人が開いた、清水寺の山門をはいった所にある甘酒茶屋のことである。（今は孫に當る人達で、この甘酒茶屋と、清水坂に大槻香月堂という土産物店を經營している）大槻重助は丹波の出身で、清水寺本坊成就院の住職月照の下僕と